

[donc]

D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418

418, Komei-cho Tsu-shi

TEL 059-226-2766

FAX 059-229-0967

N° 66 octobre 2003

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

定期総会 今年度事業予定など決定

三重日仏協会2003年度総会は7月13日津市のプラザ洞津で開催、2002年度事業報告と会計報告、2003年度の事業計画と予算計画および役員（全員再任）を決めました。このなかで今後の事業について共催要請や提案があり、来春3月12日（金）に＜ガブリエル・フォーレ没後80周年記念：井上二葉ピアノ・リサイタル＞をMUSAION音楽企画と共催すること（詳細はdonc次号で）、また会の事業として恒例の文芸講演会のほかに今後哲学や経済問題などをテーマとした講演会も開催する方向で準備を進めることとなりました。

このあと高岡優希先生の記念講演とシャンソンコンサート（3面に関連記事）、『パリ祭』パーティーと盛会が続きました。

11/20（木）ボジョレ・ヌヴォー・パーティー

『パリ祭』に続く今年度の主な事業として、「11月の第3木曜日」恒例となったボジョレ・ヌヴォー・パーティーをワインショップ・ウチャヤマと共催で開催します。今年の夏のヨーロッパは異常な暑さで、特にフランスにおいては猛暑のため多くの犠牲者が出たほどでしたが、この猛暑がワイン作りには逆に吉報となり、すでに「2003はグレート・ヴィンテージ」との呼び声が高まっています。当然ボジョレの新酒も世界中のファンに待望されているわけです。秋の夜長、「出来たて、届きたて」の2003ボジョレを味わいながら楽しいひとときを過ごしましょう。お楽しみของเกมやトンボラ（福引き）も用意します。

- ・日 時 11月20日（木）午後7時より
- ・場 所 プラザ洞津（近鉄津新町駅西） 3階宴会場 Tel：059-227-3291
- ・参加費 5,000円 *チケットの枚数に限りがありますので、お早めに申し込んでください。
- ・問い合わせ・申し込み先 長田（ウチャヤマ） 059-226-3312
滝沢（三重日仏協会）059-225-2517

会費納入のお願い

総会ご欠席などで今年度会費未納の方は、同封の振込用紙で3,000円をお振込み下さいますように。

会員の随想

四日市市在住の会員・波多野健治さんは愛知県の国際課にお勤めで、2000年からこの3月まで3年間、駐在員としてご家族とともにパリに滞在されました。任期が終わって帰国が迫ったときには「親子3人で帰りたくないよーと泣き暮らして」おられたとのこと。今後、三重日仏協会の活動を通じてフランスとの接点を保ちたいとの心強いお言葉です。お願いして以下のような一文をいただきました。

私の過ごしたパリ時間

波多野 健 治

以前からパリには出張で何度も行ったことがあった。だから、駐在員としてパリに赴任したときも、私は大都会というのはどこでも大同小異だという散文的な感想を持ったにすぎない。

家族を伴ったパリでの暮らしが出張者から生活者のそれへと定着し始めるとともに、パリは今までに私の知らなかった様々な表情を見せるようになった。道の両側に並んだ石造りの建物はどれも重く堅牢で、あたかもパリの街全体が一個の複雑な彫刻であるかのような印象を与えた。白い石造建築との対照の中で街路樹の緑はひととき鮮やかに引き立って見え、建物と建物の間に細く切り取られた空の一片さえ、日本のどかな広い空とは別種のもののように思われた。私はことさら都市計画に興味を持っていたわけではないし、名所旧跡の知識に長けていたわけでもないが、この街で目にする景観は、自分が明らかに日本とは別の時間の流れる場所に立っていることを実感させた。



パリの事務所にて

かつて小林秀雄は「歴史とは思いつくことだ」と感慨を述べたが、パリの人びとは日々「歴史」に囲まれて暮らしている。繊細な気候風土の中において、四季折々の景物から喚起される情緒によって心理的に手繰り寄せられるのが日本の歴史なら、フランスの歴史は手を伸ばせば触れられる建造物のかたちをして、見る者に明快で合理的な解釈を要求する。これは日本において私が一度も感じたことのない経験だった。

私は次第にフランスという国の文化に一種の奥行きを感じ、いくらかでもその深さを測るためには相当の時間が必要に違いないと思うようになったが、最初の1年が過ぎ、滞仏2年目に入って、相手の懐がとめどもなく広いことによりやく気付き始めたとき、私は自分がもはや単なる観察者でなくなっていることを併せ知った。ある文化的背景を持った個人が、他の文化に接してそれを理解しようとするとき、彼が理解しようとする第二の文化は彼自身の精神にも影響を及ぼして、ある種の化学反応を引き起こすものであるらしい。第二の文化を体得しようとする努力は、少なくとも一面において、第一の文化を失念することである。

フランスの言葉、それを話す人びととの関係、その風俗習慣や季節感覚が私の中に積み重なって馴染み深いものとなり、私の体質の一部を作っていくように感じられたのは、パリでの生活が3年目を迎えようとする頃だったのだろうか。「今年の冬は寒いね」と私が言うとき、すでに私は去年の、また一昨年の日本ではなく、パリの冬を考えていた。それは「パリの冬は寒い」という旅行者の感想とは別のものだったと思う。「春立つ今日の風」を味わうためには、「袖ひちて結びし水の凍れる」昨日の記憶が確かなものでなければならない。降り続く氷雨が舗道を濡らし、早く暮れる日の夕方には焼き栗屋が道行く人びとを誘い、カフェの曇った窓ガラスに暖かな灯のともる冬。ほとんど太陽を見ないで過した数ヶ月の後に、突然訪れる春がもたらす新鮮な生命の息吹。

私のパリ生活は3年間の駐在任期満了とともに終わり、帰国して半年を経たいま、再び日本での日常こそが自分の日常となりつつある。空白期間は決して短くはなかったが、住み慣れた畳の家に住み、耳に馴染んだ母国語を話す生活を回復するのに、大きな支障はなかった。実を言うと、あまりにもあっさりとした日本の生活に再適応してしまっている自分にある種の戸惑いすら覚えることがある。だが、その戸惑いの中で私はひそかに信じている。やがて再びパリを訪れたとき、私の思いを領するのは新たな出会いの喜びではなく、むしろ旧知の事柄に頼りたくなるような懐かしさに違いない、と。

(1面より) 総会記念講演

高岡優希先生 (大阪大学講師、四日市市在住)

<フランス革命と当時のシャンソン>

まず「フランス革命そのものについては、皆さんそれぞれよくご存じだと思いますので、私は革命時代のフランスでどのようなシャンソンが歌われていたのか、またどんな意味をもったのかお話したい」と前置きされ、6曲の歌詞を含む詳しい資料をもとに講演されました。



- 1789年7月のバスティーユ蜂起以後、革命が進行する中で毎年何百曲ものシャンソンが作られ民衆によって歌われたが、それは当時文盲の人が多く、革命の政治宣伝をするためには「歌」がその記憶手段として最適であったからとも考えられる。

- 革命下でもっとも広く歌われたシャンソンとして紹介された曲

- ①Vive Louis XVI 『ルイ16世万歳』(1789)
- ②Ça ira! 『サ・イラ』(1790)
- ③la Camagnol 『ラ・カマニョール』(1792)
- ④La Marseillaise 『ラ・マルセイエーズ』(1792) のちに国歌となった
- ⑤Le Chant du Départ 『出発の歌』
- ⑥Combien j'ai douce souvenance 『愛しい追憶』(1790頃)

- ①の題名は意外だが、革命の初期には王は革命の敵とは見なされておらず、例えば1790年の革命一周年の集会にルイ16世が出席している。また王妃マリー・アントワネットも②の『サ・イラ』を好きで歌っていたといわれる。



講演のあとパーティー会場に移動して高岡先生によるシャンソン・コンサートが催され、おなじみの名曲が次々と披露されましたが、その透明感あふれる本格的な美声に一同うっとり、最後の<Aux Champs-Elysées>では全員が声をそろえて唱和しました。

仏和辞典「逆引きクイズ」

日本でもよく知られているフランス語の単語を仏和辞典で引いたら次のような訳が載っていました。さて、その単語とは? 日本でやや乱暴に使われている傾向もありそうですね。

- 第1問 ①率直な、無邪気な ②ばか正直な、世間知らずの ③自然な、素朴な
- 第2問 ①かしら、長、指揮者 ②大物 ③料理長
- 第3問 ①精神、心 ②思考、知性 ③気質 ④才気、機知 ⑤精髓
⑥精霊(キリスト教で) ⑦精

大橋与成さんが2冊目の出版

四日市市在住の会員・大橋与成さんが、2000年刊の小説「仏領印度支那にさ迷う」に続いて、この度「戦後の昭和」雑記帳－エッセーと小説－を発売されました。ベトナムやクエートでなど海外生活が長かった筆者ならではの視点による興味深い随想と一編の短編小説。ご病気療養中の労作です。

読書会

次のテキストはMarcel PAGNOL <La Gloire de mon père>

会員有志で続けている「フランス原典による読書会」は、11月から7冊目に挑戦します。テキストは前回のマルセル・パニョル「お母さんの城」が比較的平易で面白かったので、次も同じ『子どものころの思い出』のなかの「お父さんの栄光」に取り組むことにしました。映画『マルセルの夏』のもとになった楽しい作品です。まだ間に合いますので新しい方の参加を期待します。
(059-226-2766 井土まで)

東西「日仏」情報

日仏会館創立80周年記念 日仏文化講座 ～近代日本の建設とフランス～

1924年（大正13年）に渋沢栄一とポール・クロードルによって設立された日仏会館は来年3月に創立80周年を迎えますが、これを記念してこの秋、維新前夜から明治期の日本における日仏交流の各分野で指導的役割を果たした日本人にスポットを当てた魅力的な連続講演会が開催されます。

参加費：1,000円

会場：日仏会館（東京・恵比寿） 開始時間：毎回午後6時（いずれも火曜日）

10/7 <思想> 中江 兆民 井田 進也氏

10/14 <政治> 西園寺公望 鳥海 靖氏

10/21 <美術> 黒田 清輝 三浦 篤氏

11/4 <経済> 渋沢 栄一 鹿島 茂氏

11/11 <文学> 永井 荷風 加藤 周一氏

またこのほど日仏会館・日仏協会のホームページがスタートしました。
<http://www.mfjtokyo.or.jp>

関西日仏学館（京都）シネ・クラブ

10月のスケジュール

会場：同会館内稲畑ホール 開始時間：午後7時 観覧料：一日会員1,000円

10/2 『オルフェの遺言』 ジャン・コクトー監督・主演 (1960)

10/9 『なまいきシャルロット』 クロード・ミレー監督 (1985)

10/16 『ニコラ』 クロード・ミレー監督 (1996)

10/23 『望郷』 ジュリアン・デュヴィヴィエ監督 (1937)

10/30 『肉体の冠』 ジャック・ベッケル監督 (1951)

「逆引きクイズ」の答え

(1) naïf(m), naïve(f) ナイフ（男性）、ナイーブ（女性） (2) chef シェフ (3) esprit エスプリ